

と み ぐすく  
豊見城市の「戦跡」

「戦世の“証人”」が伝える

こゝへ

ふるさと  
故郷の沖縄戦

豊見城市教育委員会

## はじめに

---

(沖縄戦を伝えよう

～「人」から「モノ」へ、

さらに「人の心」へ～

「豊見城市の戦跡」は市内に所在する戦争に関連する遺構や「跡地」の概要をまとめ、紹介したものです。

沖縄戦終結から約70年が経過しようとしています。当時、青壮年層として社会を構成していた人々の多くがお亡くなりになり、今かろうじて、その時代に幼少期から児童生徒だった人々が、「体験者」として戦争を知らない世代に当時のようすを語ってくれています。

このように戦争の実相を伝えていく手法も、いずれは「人（体験者）」から「モノ（戦争遺跡など）」へと、変化していくこととなります。これからは残された（あるいは消滅した）戦争関連遺構（戦跡）や場所などを使って、いかに当時の状況を、戦争を知らない世代の心の中や想像力に映し出させ、正確な実相をどう伝えていくかが重要な課題となっていくことでしょう。

本書が、自分たちの住む地域と沖縄戦の関係について考えていく際のガイドマップとして、多くの皆さまに広く活用され、戦争と平和について、戦跡の保護や重要性について理解して頂く手助けとなれば幸いです。

2014年（平成26）年6月

## 豊見城の位置と沖縄戦との関係

豊見城村(当時)は、沖縄戦において、特徴的な位置条件を占めていました。県都・那覇市に隣接し、日本軍の重要な施設であった小禄飛行場(現在の那覇空港)や那覇港を間近にひかえていたため、米軍の集中攻撃の余波を大きく受け、被害が拡大しました。

沖縄戦直前には、那覇から糸満にかけての海岸が米軍の上陸予想地点に位置付けられたため、豊見城の沿岸部に住んでいた住民が、一時内陸部に移動させられた事実もあります。そのほか小禄飛行場に隣接する補助滑走路として「与根飛行場」の建設があったり、さらに海軍司令部などの軍隊の拠点が置かれたことや、饒波川、国場川には水上特攻部隊が配備されるなど、豊見城の人々は、地上戦・航空戦・海上特攻など戦場の多様な場面に遭遇することとなりました。

## 戦争前の人々のくらしのようすをつたえる「もの」・「場所」

### ① ごたいてん きねんひ 御大典記念碑 (字保栄茂)

現存・見学可

昭和天皇即位(御大典)を記念して集落内のウマイー(馬場)を整備したとき建立されたもの。

保栄茂馬場広場の観覧スタンドにあり、「御大典記・・・」「昭和三年」と刻まれた文字を読み取ることができます。昭和3年は御大典を記念して全国各地で記念行事や公共施設(運動場や道路など)の建設、改修事業などがさかんに取り組みられました。



馬場広場にいまも残る御大典記念碑

きげんにせんろつびやくねんさいきねんけいようだい  
② 紀元二千六百年祭記念掲揚台  
(字保栄茂)

現存・見学可

昭和15年(1940)に、保栄茂青年団が「紀元2千6百年(※注)」を記念して製作した国旗掲揚台。旧公民館敷地内にあり、セメントで仕上げられた掲揚台の表面には、「記念 二千六百年祭」「昭和十五年一月六日青年団」と読み取ることができます。



青年団が紀元2600年祭を記念してつくった掲揚台

※注：紀元二千六百年祭 1940年(昭和15)は、皇紀2600年目の節目にあたる年だとして全国各地で様々な記念事業が取り組まれた。県内ならびに豊見城においても集落の共同井戸や拝所、門中墓などの改修、国旗掲揚台の設置等、記念事業がさかんに取り組まれました。

③ デークガー(字平良)

現存・見学可

この井戸は集落内を走る旧県道7号線沿い、平良公民館に向かう坂道の入口かどにあります。「紀元2千6百年(※注)」を記念して改修された井戸の前面壁がいまも残っており、柱状の中央部分に「紀元」、「記念」と刻まれた文字が確認できます。なお、この井戸のコンクリートの骨組は物資不足と儉約の世相を反映し、その骨組には鉄筋は使われず竹が使用されたと言われています。



紀元2600年にあわせて改修された  
デークガー

## 戦争直前の豊見城の様子を伝える「場所」

### ④ よねひこうじょうあと 与根飛行場跡(字与根・翁長)

#### 変貌した跡地から想像してみよう

市内西海岸の字与根から字翁長にかけて広がる志茂田平野に沖縄戦直前にかけ日本海軍の飛行場が建設されました。豊見城の住民をはじめ、周辺地域からも多くの住民らが建設作業に駆り出され、現在の国道331号線に平行する形で滑走路が築かれました。沖縄付近に迫りくる米軍の進攻に備え、小禄飛行場の補助飛行場として建設に着手されましたが完成をみませんでした。



沖縄戦直前に建設された「与根飛行場」。白く造成された滑走路が現在の国道331号線沿いに走っている。

### ⑤ かかず 嘉数バンタ(字嘉数)

#### 変貌した跡地から想像してみよう

1944年(昭和19)10月10日、那覇市は米軍の艦載機によって大空襲にみまわれました【10・10空襲】。沖縄戦の始まる半年前のことです。この空襲で那覇の市街地の大半が焼け、大勢の市民が亡くなったりケガをしました。隣接する豊見城には被害はほとんどありませんでしたが、多くの村民が初めて空襲の恐ろしさを目の当たりにしました。



那覇の街が一望できた嘉数バンタ(昭和初期)

嘉数バンタは漫湖をはさみ那覇市の街並みを一望に見おろせる高台です。当時の体験者によれば「空襲で炎上した街の炎の熱波が風によって伝わってきた」ほどだったと言います。空襲の直後には、焼け出された那覇の人々が、豊見城にも続々と避難してきました。10・10空襲は迫りくる沖縄戦の気配を豊見城の人々に強く印象付ける出来事でした。



現在の嘉数バンタのようす

### この時期、こんなうごきがありました。

- 豊見城村内に日本軍の部隊が次々と配備され、ムラー（いまの公民館）や民家などにも軍隊が宿泊するようになりました。
- 軍の陣地づくりや壕掘り作業に多くの人々がかりだされました。
- 村内の小学校2校が学童疎開に出発しました。（1944年8月～9月）  
豊見城第1国民学校（今の長嶺小学校）→宮崎県岩戸村、上野村へ  
豊見城第2国民学校（今の座安小学校）→宮崎県北郷村へ

## 鉄の暴風にさらされた豊見城のようすをつたえる「モノ」・「場所」

当初、米軍の上陸地点に想定された西海岸・・・

### ⑥ 瀬長島

#### 変貌した跡地から想像してみよう

日本軍は、米軍の沖縄上陸予想地点を数か所想定し、その一つに瀬長・与根海岸もその候補に挙がりました（実際には中部の読谷、北谷、嘉手納海岸から米軍は上陸しています）。沿岸に浮かぶ瀬長島には、米軍の進攻に備



砲撃にさらされる瀬長島  
（沖縄県公文書館提供）



瀬長島に据え付けられた砲台  
（沖縄県公文書館提供）

え日本軍が陣地を築き、島内には砲台などが据え付けられました。米軍の激しい砲火を浴び壊滅しています。また島内には瀬長集落がありましたが、住民は沖縄戦直前に島外に退去させられています。戦後は米軍基地として昭和52年まで使用されました。

## ⑦ 「アカサチ森」壕跡(字瀬長)

### 一部消滅。周囲から見学しよう

瀬長島の入口付近、豊見城警察署に隣接する小高い丘は地元では通称「アカサチ森」と呼ばれています。ここには沖縄戦のとき日本軍によって壕が築かれ、内部には井戸や海側に向けた監視窓（銃眼）などが備わっていました。豊見城海岸からの米軍の進攻に備えた陣地かと推定されます。2000年頃、開発によりアカサチ森の一部が削り取られたため、そのときに壕の一部は消滅、入口も閉ざされたため、現在は内部をみることはできません。



削り取られる前のアカサチ森壕内部（平成11年撮影）

## ⑧ 「監視所」跡(字保栄茂)

### 現存・但し普段の見学は厳しい



岩穴をコンクリートで覆い観測窓と推測される構造が確認できます

保栄茂グスクの頂上部の西側崖面に構築されたこの施設は、海上付近にいる米軍の艦船の状況や、海側に発射された砲弾の着弾地点などを観測する監視所（観測所）として日本軍によって築かれたものだと言われており、岩山の空洞を利用して、監視用の窓の部分だけコンクリートで固めた造りとなっています。普段は人が訪れることができない山中にあるため立入ることは厳しいが、戦跡めぐりなどに案内されることも多く、そうした機会にみることはできます。

## 激しい戦火にみまわれた故郷の戦跡。

### ⑨ 瀬長・田頭丘陵周辺構築壕群

#### 一部残存。周囲から見学しよう

瀬長、田頭集落後方の丘陵地帯には、沖縄戦当時、日本軍や住民らによって築かれた壕が残っています。しかし、時間の経過とともに壕内部の崩落や、開発や危険防止の理由などから壕入口をふさぐなど、その位置確認も次第に難しくなっています。



田頭丘陵に残る壕の内部

田頭・名嘉地一帯は沖縄戦のとき当初、対戦車用の砲兵部隊が配備されており、このことも豊見城沿岸が米軍の上陸地点として想定されていたことをあらわしています。瀬長、田頭、名嘉地一帯は頑丈な二一土質（第3紀砂岩）が広がっている地域であるため、市内でも比較的沖縄戦当時の壕が残っています。

### ⑩ 「田頭のシーサー」(字田頭)

#### 現存・見学可

田頭のシーサーは集落内に2体あって、そのうち市道6号線沿いに置かれているシーサーが沖縄戦のときに、米軍の戦車から田頭の人々を救ったという逸話が残されています。1945年（昭和20）6月中旬、海岸（瀬長島）方面から田頭、名嘉地



戦車の進撃を阻んだシーサー像

方面に向け進撃してきた米軍の戦車が集落内に侵入してきたとき、突如1両の戦車が、人々が潜んでいた方向に向かって進んできました。しかし途中で戦車はこのシーサーにキャタピラを乗り越えてしまい立ち往生、前に進めなくなったため、その後向きを変え名嘉地方面へ進んでいったそうです。集落の守り神として古くから大切にされてきたシーサー。人々を戦車から護った話は今も大切に語り継がれています。なお、田頭集落のこの周辺は、

沖縄戦終盤、南部で捕虜になった兵士や保護された民間人の収容所も設置されました。

## 11 がなは我那覇ごうあと周辺の壕跡

### 一部残存。周囲から見学しよう

字我那覇集落と小禄宇栄原一帯を区切るように走る我那覇丘陵地帯、さらに我那覇集落内にある通称メヌモー付近には日本軍が築いた壕および一般住民が避難のために築いた壕が点在していました。



我那覇メヌモーの壕（平成 11 年撮影）

現在、壕のほとんどが内部の崩落や開発などの理由から入口がふさがり、その位置確認が難しくなっています。

## 12 だんこん弾痕の残る石垣(字金良)

### 屋敷の外側から見学しよう

金良集落内には、戦前からの石垣囲いが一部現存しており、その外壁に沖縄戦時に砲弾を受けた際にできた直径 70 センチ近い穴が当時のまま残っています。戦時中、字金良には東風平外間との村境付近の丘陵地に日本軍の野戦重砲陣地が置かれたため、米軍の激しい艦砲射撃にさらされました。この石垣の穴はその際に砲撃の



砲撃の破片で穴があいた石垣（字金良）

破片を受け破壊されたものと伝えられています。字金良では家々の石垣や家屋の目隠しのために置かれたヒンプンなどが、沖縄戦直前にこの重砲陣地構築のため、ほとんどが解体され供出されたといわれます。

## ⑬ 「サバキナ<sup>ごう</sup>壕<sup>あと</sup>」跡(字名嘉地)

壕入口は消滅 周囲から見学しよう

名嘉地集落の南側、県道 68 号線沿いに位置し、壕の名称は、所在する一帯が「サバキナ」と呼ばれていたことからそう呼ばれております。県道から少し奥に入って畑地帯へと抜ける道路がちょうど切り通し(ワイトゥイ)



壕入口が消滅する前のサバキナ壕のようす

になっており、その切り通しの両側に並ぶような形で比較的規模の小さな壕が密集していました。これらは沖縄戦を前にして、おもに字伊良波の人々の手によって築かれ家族や親族単位で避難用の壕として利用されたようです。2014年に道路拡張工事のため壕の前面部分が削り取られたため壕口は塞がれ、現在、内部をみることはできません。

## ⑭ 旧海軍司令部壕<sup>きゅうかいぐん しらいぶ ごう</sup>(字豊見城)

壕内部が見学できます ※有料

沖縄の海軍部隊は、小禄飛行場(現在の那覇空港)の守備を主な任務とし、沖縄戦突入前に、小禄飛行場など周辺を一望できる字豊見城の高台に地下壕を構築しそこに司令部を置きました。設営隊により掘られた総延長は約 450 mあったと言われ、壕内には司令官室、作戦室、幕僚室、暗号室、医務室、発電室、下士官室などが備わり、約 4 千人の兵員を収容したといわれています。1945 年 6 月 4 日、小禄半島に上陸した米軍が戦車などの圧倒的な兵力で司令部壕付近にせまるなか、大田実司令官から海軍次官あてに電文が送られています。電文の内容は、県民の献身的な戦闘協力と惨状を伝え、「沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世 格別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と結び 13 日には司令官以下、幕僚・将兵たちが壕内で自決し最期を遂げました。戦後、生存者や地域の協力などにより壕内と周辺の遺骨収集が行われるとともに



旧海軍司令部壕の内部

に1958年には「戦没者慰霊塔」が建立され、その後沖縄観光開発事業団（現：沖縄観光コンベンションビューロー）によって壕の復元が進められ、70年に約300mが一般公開、あわせて周辺は戦跡公園として整備され、2003年には「海軍壕公園」としてリニューアルされ現在に至っています。

⑮ きゅうりくぐんだい しだんだい やせんびょういんごう 旧陸軍第24師団第2野戦病院壕(字豊見城)

普段の見学は厳しい ※城址公園閉園中(壕内も立入禁止)

旧陸軍第24師団（通称「山部隊」）が豊見城城址東端の崖面に構築した野戦病院壕です。



豊見城城址内にある第2野戦病院壕跡（平成14年撮影）

沖縄戦序盤には、西原・浦添方面から負傷した兵士らが次々送られ、一時、壕内には6百名近い負傷兵であふれかえったといわれています。この壕には私立積徳高等女学校の生徒らが看護隊として配属され、負傷兵の治療や看護にあたっていました。5月27日には戦況の悪化とともに野戦病院壕も糸洲方面に撤退することとなり、その際自力で歩けない患者には水や乾パンなどが与えられ置き去りの処置がとられたそうです。6月26日、糸

洲の壕で看護隊に解散命令が出たとき、部隊を率いる小池勇介隊長は女学生らに「けして死んではならない。」と生き延びるよう諭し、軍とともに行動することを許さなかったため多くの女子学徒が生き延びました。学徒隊の多くが悲惨な最期を遂げる沖縄戦において積徳学徒隊からはほとんど戦死者はなく、非常に稀な事例とされています。壕は、豊見城城址公園の中で、崩落防止の鉄骨支柱を施し一般公開された時期もありましたが、その後公園の閉園と相俟って、崩落の進行が著しく現在は公開されていません。1982年、部隊生存者と学徒隊により「患者合祀碑」が壕の近くに建立されています。

## 16 とっこうてい はいび の はがわ りゅういき 特攻艇が配備された饒波川・タングチ流域 変貌した跡地から想像してみよう

饒波川に架かる石火矢橋から上流向け、字高安のタングチと呼ばれた一帯までの流域には日本軍の「特攻艇」が配備されていました。特攻艇とは小さなボートに爆薬をのせて、敵の船に体当たり攻撃を行う兵器のことです。



タングチと高安集落

特攻艇は川岸に垂れ下がる樹木の陰にかくしてつながれて配備されていたそうです。



川岸に配備されていた特攻艇  
(沖縄県公文書館提供)



現在の饒波川

戦火止んで・・・。

## 17 伊良波収容所跡

### 変貌した跡地から想像してみよう

伊良波収容所は主として一般住民が集められた収容所です。沖縄戦終盤、現在の伊良波小学校の西隣り、集落の共同井戸（カマガー）周辺にありました。この場所は、南部の激戦地でとらえられた人々が最初に送られてくる初期段階の収容所で、収容された人々はここで尋問や検



南部から次々と人々が送り込まれた伊良波収容所  
(沖縄県公文書館提供)

査を受けたのち民間人と軍人との分別され、さらに次の収容所へと移動させられました。民間人は主に宜野湾野嵩、中城安谷屋、石川などの収



かつて「伊良波収容所」があった跡地

容所へ、軍人と識別された場合には金武の屋嘉収容所などへ移されました。このほか豊見城には、田頭、与根一帯にも同様の収容施設が点在していたようです。

故郷に戻った人々が復興とともに取り組んだもの・・・。

## 遺骨収集と「慰霊碑」の建立

沖縄戦が終わり焼け野原となった故郷で、人々がまず最初に取り組んだのは集落内のいたるところに野ざらしとなっていた遺骨の収集作業でした。戦争で身近な肉親・知人を失った多くの人々にとって、それは衣食住の確保、地域の復興と同じように心をゆさぶる大切なことだったのです。豊見城でも各地で遺骨収集が行われ、各字ごとに慰霊塔や納骨堂がつけられました。

こうして納骨された遺骨は、その後1957年（昭和32）、那覇市識名にできた「戦没者中央納骨所」にまとめて移されることに伴い、各字にあった慰霊塔なども徐々に姿を消していったようです。



真玉橋地内にあった「真珠乃塔」

識名の納骨所に祀

られた遺骨は、さらにそのあと1979年（昭和54）、厚生省が建立した糸満市摩文仁の国立戦没者墓苑に移され現在に至っております。そのような経緯で、いま豊見城市内には当初、建立された各字慰霊碑をはじめ沖縄戦関連の慰霊碑がほとんど残されていませんが、現在、市内には以下の3か所の沖縄戦関連慰霊碑が存在しております。

## 18 かいぐんせんぼつしや いれいのとう 海軍戦没者慰霊之塔（字豊見城）

**海軍壕公園内 ※見学可**

沖縄戦における海軍部隊（沖縄方面根拠地隊）司令官・大田実少将はじめ、沖縄戦で戦死した海軍将兵約4千柱が祀られています。慰霊塔は大田司令官らが自決を遂げた地下司令部壕の頭上にあり、1958年（昭和33）、海軍生存者などで構成される沖縄海友会によって司令部壕の公開に先立って建立されました。1970年（昭和45）地下司令部壕の修復、公開に伴い、周辺は戦跡公園として整備され、現在は、観光コースとしても多くの来観者が訪れています。



字豊見城の高台に建つ海軍戦没者慰霊之塔  
その地下に司令部壕が保存公開されています

## 19 濤魄之塔 (字豊見城)

普段の見学は厳しい ※城址公園閉園中

1953年(昭和28)、字豊見城の人々が、集落周辺および豊見城城址一带に散らばっていた戦没者の遺骨を収集し、「英魂之塔」を城址内に建立。続く1955年には豊見城に駐屯していた歩兵22連隊の生存者らの手で、英魂之塔の隣



城址周辺で亡くなった戦没者が祀られています

に「北琉之塔」が建立されました。その後1966年に改修合祀され、豊見城城址公園内に二つの慰霊碑がまとめられ「濤魄之塔」として建立されました。現在も、慰霊の日などには毎年、字豊見城自治会の皆さんにより慰霊祭が行われています。

## 20 山部隊野戦病院患者合祀碑(字豊見城)

普段の見学は厳しい ※城址公園閉園中

豊見城城址内にあった第2野戦病院壕内に負傷兵として收容され、そこで亡くなった戦没者を祀っています。この野戦病院壕では軍医、看護婦、学徒隊(積徳高女)らが配属され、前線から送られてくる負傷兵らの治療看護にあたっていました。多いときには約600人の負傷兵が患者として收容され、治療の甲斐なく壕内で息を引き取った人々の御霊を慰めるため1982年(昭和57)野戦病院関係者および積徳女学校生存者らによって城址公園内に建立されました。

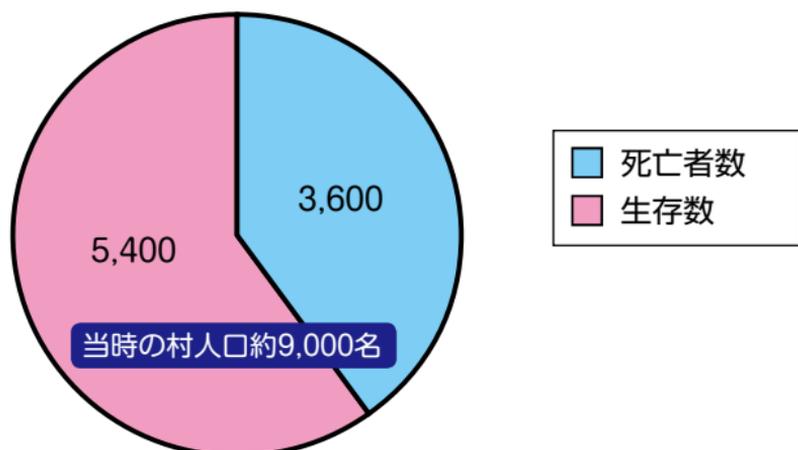


第2野戦病院壕で亡くなった人々の御霊を慰めています

## 沖縄戦の被害

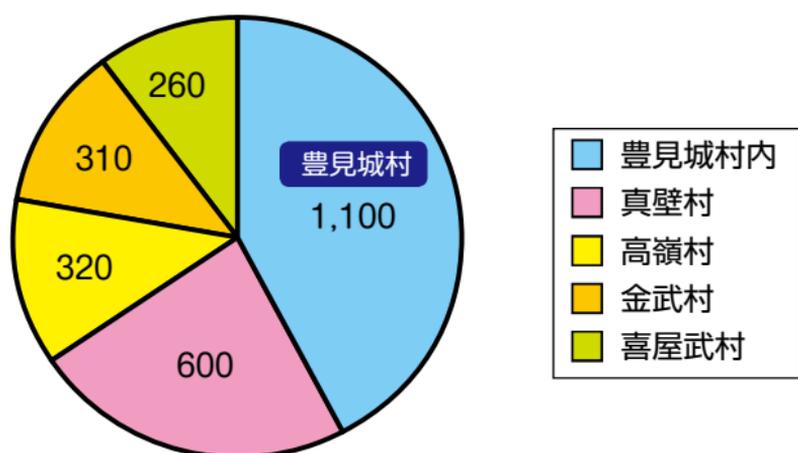
沖縄戦で亡くなった豊見城村民の数 **およそ3,600名**

(※村民の10人に4人が犠牲となりました)



村内で亡くなった人の数 **およそ1,100名**

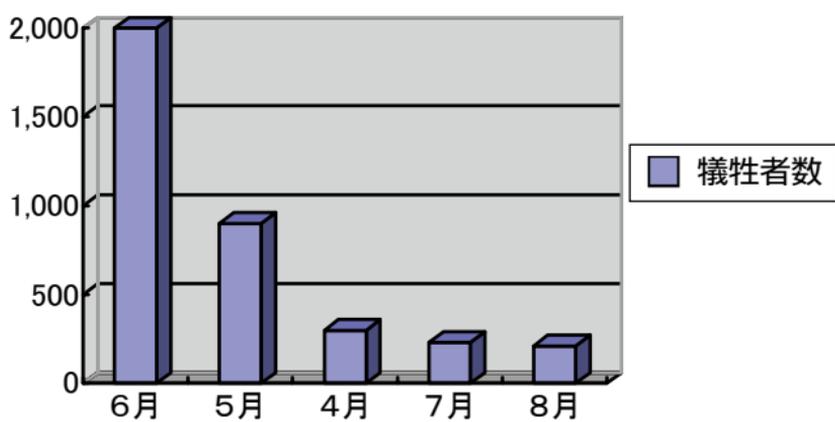
(全戦死者の3人に1人が村内で犠牲となりました。)



※豊見城を含め、南部地域が激戦地であったこと、那覇市に隣接していたため、都市や軍事的拠点への攻撃の余波を大きく受けたことなどが理由として考えられます。

もっとも多く犠牲者を出した時期

**1945年6月** **およそ2,000名**



※最も犠牲者を出した時期は、戦闘が激しさを増し、さらに人々が南部へ避難し始めた5月、6月に多く、さらに沖縄戦が終わった6月以降も大勢亡くなっていることが分かります。これは戦争で受けた傷や栄養失調などによるものだったようです。

## 戦争により貴重な文化遺産も破壊されました。

真玉橋は、1836年に石造橋として建設されて以来、那覇と南部を結ぶ交通の要衝として戦前までその美しい景観と威容を誇っていましたが、沖縄戦のとき、日本軍によって破壊されたと伝えられています。ほかにも豊見城城址や石火矢橋など市内の貴重な文化財が戦災で破壊されました。



戦災で破壊された真玉橋ですが、1996年の橋の工事にときに一部が出土しました。その後2003年に遺構復元

### 「戦跡めぐり」などを行う際の注意点

- (1) 必ずおとなの人と一緒に行動しましょう。とくに壕の中に進入したり山中に入ったりすることはたいへん危険です。
- (2) 戦跡が個人の敷地内であれば、勝手に入って見学するのはマナー違反です。所有者等の了解を取り、当事者や地域に迷惑をかけないようにしましょう。

# 市内戦争関連遺構分布 (概念図)

市内戦争関連遺構分布 (概念図) について

本地図は、H12年3月印刷の豊見城村地形図を使用し、1944~45年に構築、または今次大戦に関連する主な遺構等の位置を示したものである。但し、本地図に図示されたそれら遺構等の位置、規模などは、若干の誤差があることをご承知願います。

※壕の名称などは、とくに固有の名称がある以外は、その壕の位置する地名、小字名などを使用しました。

※そのほか、地図に示された施設、地名等は、沖縄戦前後、村民が徴用動員された場所や軍の施設、収容所等のおもな位置をあらわしました。



13 サバキナ丘陵のワイトウイ(切通し)にあった民間壕(入口消滅) (字名嘉地)



11-A 我那覇メーヌハルに残る民間壕(壕の内部)



11-B 我那覇丘陵の軍構築壕(児童公園近く)



9-B ウフヤモアの軍構築壕(字田頭)



9-A 瀬長丘陵に残る軍構築壕(舟無小原)

日本軍の陣地壕、住民の避難壕が集中した瀬長、田頭丘陵



7 アカサチ森の軍構築壕内部(字瀬長・一部のみ残存)



7 コンクリートで造られた観測窓(または銃眼)と思われる施設(アカサチ森軍構築壕内)

4 与根飛行場



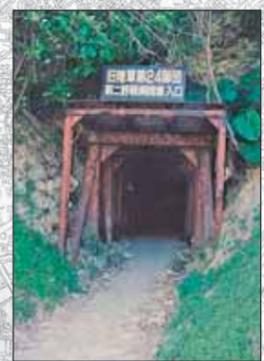
壕の入口の状態



14 沖縄方面海軍根拠地隊司令部壕(字豊見城)



18 海軍戦没者慰霊の塔(字豊見城)



15 陸軍二四師団第二野戦病院壕(豊見城城址公園内)



豊見城城址公園内に建立された2つの慰霊碑

20 (上) 第2野戦病院患者舎記念碑

19 (下) 瀧嶋(とうはく)の塔

12 弾痕の残る石垣(金良)



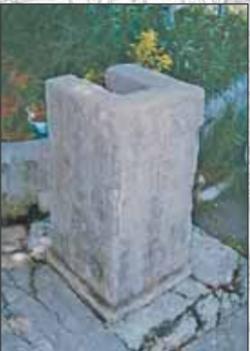
12 弾痕の残る石垣(金良)



3 紀元二千六百年記念改修 字平良のテークカー(井泉)



1 御大典記念碑



2 紀元二千六百年記念掲揚台(字保栄茂)



8 監視所と思われる施設の内部(保栄茂グスク)

保栄茂グスクと同様の監視所(イリウタキ内)

8 保栄茂グスクの監視所

(伊良波)

終戦後の村民収容所

(座安)

イシヌハナモア

日本軍の陣地壕や住民の避難壕が集中したウィドウギ丘陵

日本軍(仁位隊)の陣地のあった平良丘陵頂上部

海軍砲台があった場所

陸・海軍新陣地壕を構築したアカンクウクイモア

陸軍の特攻艇のけい留地となった饒波川流域(石火矢橋からタンクチにかけて) (\*真玉橋から長堂にかけての園場川流域にもあった。)

歩兵第22連隊本部がおかれた場所

魚雷格納壕があった場所

山部隊の壕(村民のこま運搬動員の起点となった場所)

海軍司令部壕

終戦後、真和志村民(当時)が一時居留していた場所

日本軍の陣地壕が構築された長嶺グスク帯

日本軍の陣地壕が構築されたアカンクウクイモア

日本軍の砲兵陣地があった場所

× 七



瀬長海岸に向けた観測窓と思われる施設（アカサチ森塚）

## 豊見城市の戦跡

---

発行：平成26年6月  
豊見城市教育委員会文化課（中央図書館1階）  
〒901-0232  
豊見城市字伊良波392番地  
電話：098-856-3671

---